
Square the Circle

風花くるり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Square the Circle

【著者名】

N1628E

風花ぐるり

【あらすじ】

場所は現代日本みたい。で、男性アイドルが主人公。でも、芸能界の話にあらず。終わりはアンハッピーを想定。心理描写特化。していつもり暗し……メンヘル系

「すっぴえーー！」

歓声をあげるタケルに、緊張が走るのがわかつた。

「あぶないよ、タケル」

今にも口笛でも飛び出しそうなテンションで、身を乗り出すから注意をする。

だけどヒヤツハツハツと笑って、覗き込むのはやめようとはしない。まあ、もとより聞くとも思っていないが。

明るく元気と評判のタケルが、実のところ一番壊れているのを俺達は知っている。

どうして誰も気づかないの？ 周囲の愚かさを嘲笑いながら、それでも心の片隅で気づいてくれと願っていた。
それはもうかなわないことだけれど……。

俺がタケル及びその他3名と出会ったのは、1年ほど前のこと。
その時にはもうすでにダメだったのだと思つ。
俺達は出会いうのが遅すぎた。

違和感は俺達の距離が縮まるにつれて大きくなつていた。
でも確信をしたのはあの日……。

その日、俺達は楽屋で騒がしく差し入れの軽食を奪い合っていた。その中心で騒いでいるのがタケル。

俺達の中で一番小さく、細身のクセに一番よく食つ。

しかも食い意地がはつてているもんだから、こんな時率先して奪いに行くわけだ。

逆に、一口くらいは食べたいなーなんて思いつつ、だけどそこへ突入するのをためらうのが俺で、騒ぎ立てるガキどもに食傷氣味になつて傍観者に徹するのがサトシ。

タケルの横でアキラが俺にもよこせと、タケルと張り合える騒々しさを存分に發揮して叫ぶ。

「よりも先に手ができるのがリョウ。不言実行できっちり自分の取り分を確保。

欠食児童かつてぐらに最後の一 片まで奪い合うその姿勢に、食べたかつたことも忘れて感心していると、横でサトシがつぶやいた。

「てめえらは人間じやねえ」

見事に散らかつたソレを、ありつけなかつた俺がなんで片付けるんだろうなー、なんて思いながら適当にまとめている時だった。リョウは手伝ってくれて、サトシが呆れた顔で見ていて、アキラは俺の隣にあつた椅子に腰掛けて携帯をいじりだしていた。タケルはテーブルをはさんだ俺の真正面。

「邪魔だよ、タケル」

お前が言つなつて感じのアキラがそう言つると同時にくらい。

「いたツ」

俺の指先に痛みが走つて、慌てて見たら線が一本。みるみる真紅の液体が玉を結ぶ。

男にしては珍しいことかもしれないが、俺は血がまったく平氣だつた。

と言うより、血の紅が好きだった。他人を傷つけて見ようとする

ほどのかれてはなげ、自分が怪我して流れる様に見入るぐらじには。

「どうした?」

リョウが覗き込む。

「厚紙で切つた」

「厚紙つ! ソレ、地味くに、でもすっげえ痛いじゃん」
顔もあげないでアキラがそう言い、眉間にしわを寄せた。
こんなに厚さがあるのに切れるんだなあ、なんて思いながら血が
流れだすのを見ていた。

「段ボールで切つたって話も聞いたことあるぜ?」

「それ痛いつ! つーか聞きたくねえよ!」

「紙は切れ味が悪いからスパツときれいな切り口にならないんだつ
て。つまり、傷口がギザギザ。だから小さい傷のわりに痛みが大き
いんだつてさ」

「聞きたくなーって言つてんだろつ! このサドシつ!」
携帯を放り出すかのような勢いのわめき声を聞きながら、ふとい
つもなら一番うるさいはずのタケルが静かなことに気づいた。
顔を上げると俺の指先を凝視している姿。思わず呼び掛けようと
する俺をさえぎったのはリョウの声だった。

「いい加減、止血しろ」

「あ。……ああ、そうだな」

片手に消毒液を持ちながら、同意した俺の手首をつかもつとした
リョウ。

だけど先につかんだのはタケル。

ピチャリ。

柔らかな舌が血を、舐めた。

声を発すことじころか、身じろぎ一つすることもできなかつた。
それは皆同じよつで、息を殺して舐め啜るタケルを見つめ続けた。

例えかすかでもなにかしらの音を立てれば均衡が崩れると、無意識に感じ取っていたのだろう。

だが、そうしていても、終わりがぐんぐん近づいて来ている気がして、悲鳴を上げそうになる自分を懸命に抑えつけた。

いくら柔らかいとは言え、傷口に触れればチリリと痛む。そして傷口に触れると言つことは、終わりが来たつてことで……。

そして、動きを止めたタケル。

恐る恐る。

でも声は震わさないよつに。ひつそりと。
「タケル？」

ガタンッ！

でかい音と、尻にガンッと来た衝撃、脳みそが状況を把握できず[ぐらぐらする]。

衝撃が收まり、急いで目を開けた。

「……喰いたい」

すぐ目の前にあつたタケルの唇がそんな言葉を紡いだ。

「喰つて、全部俺の中に……」

どこのにも行かさないよつに……。常に共にあるよつに……。

「……俺を？」

「お前も、だ」

イケナイコトを言つたみたいにうつむきちゃつたから、タケルが今どんな顔をしているかわからない。でも……。

「愛されてるな、俺」

弾かれたように俺を見たタケルに違つか？ といつ意味を込めて笑いかける。

タケルは泣き笑いみたいな顔をして、言った。
「だから、お前だけじゃないって」

愛しくて哀しくて……。ちゃんと抱きしめた。
……泣きたかったけど、泣けなかつた……。

どうすればいいかもわからず、ただ俺達のせいで加速される崩壊を見てきた。

今の時代、人間は狂うんじゃない。気が違うんじゃない。
壊れる。
それこそ、ツクリモノのよう。

「水臭い」

弱い反論を俺と同じ歳のリョウが一刀両断にした。

そう、水臭い。

サトシはわずらつている。

それは、もう入院とかしておかないといけない段階なんじゃないかと思う。教えてくれないからわからないけど。

でも今すぐ死ぬってわけじゃないらしい。サトシがそう言つただけだから、本当のところはわかつたもんじやないけど。

でもずいぶん前から、サトシは死を見つめていたのだ。気づかずには、どつか一本神経の抜けたテンションで面白おかしく未来を語る俺達の横……サトシは死を見ていた。

そんなことずっと俺達に気取らせなかつたし、気づかなかつたらあつさり1人引退してそのままフェードアウトとかしたに決まっている。

俺達が気づいたのは、たまたま。

体力が落ちていくサトシに、『もうおっさん化?』なんて茶化していた俺達が知ったのは、ホント、たまたま。

その日は一際サトシの動きのキレが悪かつた。

だからと云つて、その長い手足が動く様は優雅でいつもと変わりない。

ただ最近、一緒にやっている俺達が違和感を感じる程度の微かな

異常が増えていた矢先のソレに、俺達の脳裏に少し不安がよぎった。タケルやアキラですら、俺やリョウに問いかけるように視線を送つてきたり。

俺達の前ですら常に完璧であったサトシがそんなことを感じさせるなんて、昔から考えるとありえない話だつたから。

楽屋に戻るなり壁にもたれ座り込んだサトシの周りに集まつた俺達。大丈夫だと言いながら煩わしそうなサトシは、その時致命的なミスをした。たぶん、普段のサトシならばしないであろうミス。

俺達の追及から逃れるように確認もせず出た携帯。金切り声の女性が言った一言は、すぐ傍にいた俺達にも十分聞こえた。

『病院に行つてないつてどうこいつ事ツー』

俺達の前で電話を終えたサトシを当然ながら俺達が問い合わせ、完璧でないにしても聞きだした事柄は、病氣であること、やつ長くはないこと、でもそんなく死ぬわけではないこと。

……俺達には最後まで秘密にしようと思つていたこと。

すべてを聞き終えた俺は、なにも言えずに……ただサトシの投げ出された左手から滑り落ちそうになつてゐる真紅の携帯を眺めていた。

サトシが帰るぞ、と呟いてしまひ、ずっと。

ずいぶん日数を必要として眩暈のする現実を俺がやつと受け入れられた時には、タケルは更に壊れていた。

何をおいてもタケルの傍にいてやるべきだったと、気づいた時は遅かった。

なんだって俺は、いつだって俺は、肝心な部分で後手後手に回つてしまふんだ。

「まだ～？」
アキラがリョウに尋ねた。

「まだ」

手も休めずリョウが短く返す。

「ちえ～っ」

こんな時ばかり双子のようこぴつたり声のやひつ、タケルとアキラ。

さつき腕を止めたのでセシット田をやり直しすることにしたらしきから、もう少しかかるだろ？

ゆっくり時間をかけて腹筋をしているリョウを見やる。

正確に言つとカタカナの名前がついているらしい……リョウが言つてた……が、腹筋トレーニング法の種類なんて俺は覚える気がなかつたので記憶に残っちゃいない。

ついでに言つと、いまさら調べる気もないで悪しからず。

そんな俺と違い、いまさら、なんて考えず口課の筋トレに励むところがリョウらしい。

それを止めるとも言わず待つている俺たちも、らしい。

リョウがなぜ俺たちと来る道を選んだのか、俺には理解できない。アキラと同じく、出合った仲間が俺たちじゃなかつたら、リョウはリョウらしく健全に生きていたのではないだろうか、これからも。

「別につきあう必要はないんだぜ？」

俺がそう言つたら、表情の変化がえしいリョウが目を見開いた。

そんなに驚くことかよ、と思つた。

あれはサトシが病院へ行くと一番に仕事を終え帰り、騒がしい二人……アキラ＆タケルのコトだもちろん……を次に終わらせ、俺達二人が最後に残つた日のこと。

「お前には理由がないし」

黙つたまま返事がないから続けてそう言つた。

リョウが離別の道を選んだとしたら俺はどうするべきだらう？
リョウがまったく傷つかず生きていけるとは思えない。表面に見せなかつたとしても深く深く傷つくはずだ。

俺は……。

「その言葉、お前に返す

「……俺？」

思考に沈みそつになつた俺を現実に戻したリョウは、俺が考えてもみないことを言つた。

「そう、お前」

「俺は……お前達といるよ、最後まで」

そう、それは決めてある。ただ一手に分かれられた場合が問題だ。

「俺もそうだ」

リョウはきつぱり言い切つた。

「でも……生きていいけるだろ？ お前は
傷ついても、一人で……。

普通に家族がいて、普通に俺達以外の友人がいて……無口で無愛想でもなぜか人が寄つてくるんだよな、リョウは。

至つてマトモに健全に育つて、たぶんこれからも真っ直ぐ生きていける。いささか真っ直ぐ過ぎるくらいがあるけど、これだけたくさんの人人がいるんだ、こんなのもいていいと思つ。

「生きていって欲しいのか？」

「……ああ、そんな感じかもしれない」

誰か一人くらいココに残つて欲しいのかもしれない。その一人に俺がなるのはごめんだけど。

「お前には悪いがそんな気はない」

「うう」

もう腹を据えてしまつている顔つきにて説得の言葉も出でこなかつた。

リョウも言う気がないのか、もうすることもないのに控え室で一人黙つたまま座り込んでいた。背中合わせで。

「なあ

「なんだ」

寝ちゃつたのかと思つべらり長い沈黙の後、俺が呼びかけるといつもどおり潔さの感じられる声が応えた。

「アキラがさ」

「ああ

「もし、残るつて言つたら、リョウ、一緒にいてあげくれない？」

「お前がいてやれ」

「俺よりさ、リョウのがここよ、きつと

「言わんと思うがな」

「だから、もじだつて言つてるだろ？」

「どうせ可能性のないことだ。いいだろ？」

それでもさ、ココについて欲しいな。リョウとアキラには。

こんなコトにまでつきあいイイとかノリがイイとか、どれだけなのって話しだし。

「俺さ」
「ん」

「うそり秘密を話すよつて。リョウにだけさせやこた。

「皆のこと好きなんだ」

珍しく素直な俺にリョウは言った。

「俺もだ。ついでに言うと、そんなことみんな知つている」
うん、だから最後までいたいんだ。

思い返すと、じわりと涙腺にキタ。

幸いなコトに、零れ落ちるのは思いどじまつてくれたけれども。
短い休憩をはさんで3セット目に入つたらしいリョウに、お前見て
ると飼い主を待つしかなかつたハチ公を思い出すよつて言つたら
怒るかな。

実際は飼い主がくれていたエサ待ちだつたつてぶつちやけ話もあるけど。

エサなんかなくてもリョウは迎えに来てくれるよね。絶対に。

ゲラゲラ笑っていたアキラがすっと笑みを消し去る。
それだけで、ガラリと雰囲気が変わる。悪ガキにしか見えなかつた横顔が、年相応の男……いや下手すりや一番年上に見える顔になる。

アキラはメンバーに選ばれなかつたら、今、ココにいなかつたんじゃないかと思う。

出会つたのが俺達ではなく、もつともつと上を目指して生きてる奴らなら、そいつらと同じように生きていた氣がする。

ずっと……ずっとそつ思つていた。

「最高に上り詰めた時に、終わりたいな
アキラがそう言い出すまでは。

アキラの一言には当然ながらサトシがキレた。ふざけんなど。サトシの怒りは理解できるが、俺はそう言つた時のアキラの瞳にゾクリとさせられ、言葉を失つた。

別にタケルにおもねつてゐるわけでもなく、サトシの心情が理解できないわけでもなく、本気で自身から湧き上がる感情が言わせているのを感じて。

ひやりと腹の底が冷たくなつた。

タケルやサトシのみに追いつめられていくわけでもなく、リョウや俺のように引きずりられてるわけでもない。

生きると云つことこ、希望どころか絶望と云つ感慨すらな。

根本的に違つ。異質なもの。

固まつて見守る俺達とは逆に、珍しく頭に血が上つたらしくサトシは怒鳴りまくった。

アキラはサトシが怒鳴り散らすのをじっと聞き、何とか言えと最後に怒鳴った時、アキラは口を開いた。

「そうは言つてもサトシ。俺は生きていこうじが辛いわけじゃないけど、いつだつて、今だつて、生きている気がしない」

そんな返事にさりにキレたらしくサトシがさらりと息を吸い込んだ。

「無駄な労力だよ、サトシ。こあたり異文化交流を始めてる時間はないだろ?」

歪んだ口元。

思わず伸びた腕。

伸ばされた腕を拒むことなく、アキラは俺の身体を抱き締め返した。

怒鳴り声が向じようが、淡々とアキラが繰り返す言葉に、サトシが言葉少なに同意を返すようになったのはそれほど時間がかからなかつた。

そして、今がその時。

リョウが立ち上がり伸びをしてくる。

アキラとタケルが顔を見合わせニヤリと笑う。

オヤジ臭い掛け声とともにサトシも立ち上がり歩き始める。

まだ、足元はしつかりしてこないので……。

仲間が俺の名前を呼ぶ。

これにて終了。

パソコンの電源は……も、そのままでいいか。

そんじやあ、それなら……違つか、バイバイ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1628e/>

Square the Circle

2010年10月8日21時25分発行